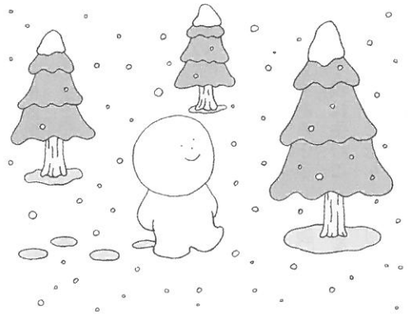
自閉スペクトラム症児者の心の理解



◉みんなの活動に自閉スペクトラム症児を参加「させる」？

自閉スペクトラム症で小学校5年のリュウ君。知的には遅れはありませんが、運動会は毎年参加できませんでした。その年はぜひみんなと一緒に参加してほしいと思い、先生が工夫をされます。聴覚過敏のリュウ君のために、音楽とピストルはなしの競技を一つつくります。「かいけつゾロリ」が好きな彼のために、競技にキャラクターも入れます。練習はよかったのですが、運動会当日、参加者の多さに圧倒されたのか彼は会場から逃げ出し、競技も参加できませんでした。私も先生も、リュウ君に楽しい体験をつくれなかったことを反省させられました。

しかし一番考えさせられたのは、その後のクラスのある子の声でした。彼は家でこう怒ったそうです。「僕はあの競技（リュウ君が参加するよう工夫したもの）も、音楽を流してほしかったし、『かいけつゾロリ』なんて嫌だった。でもリュウ君が出るために我慢したのに、なんでリュウ君、参加しなかったの！」。

リュウ君の参加は、クラスの子にとっては我慢をともなうものでした。それが怒りの背景にあったのです。障害のない子の生活に自閉スペクトラム症児を参加「させる」（「同化」）ことが、障害のない子に我慢を強いる場合、それがうまくいかないと真逆の「排除」の論理に容易に変わってしまうことを、強烈に教えられた出来事でした（図・上段参照）。

◉「異質・共同」の集団づくり

前回紹介した、小学校での今関先生の実践はこれとは違います。そこでは、自閉スペクトラム症児を障害のない子の生活に参加させるのではなく、まず障害のない子

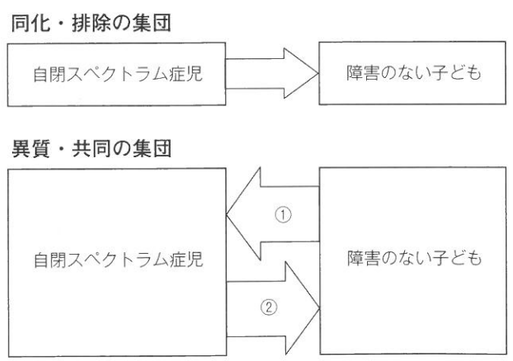
第9回

異質・共同の集団づくり

別府 哲（岐阜大学）

べっぷ　さとし／岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活－共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』（以上、全障研出版部）など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

が自閉スペクトラム症児の世界の異質さを認め、それに共感できるように大人が丁寧に働きかけます（図・下段の①）。障害のない子に共感されるとそのうれしさから、自閉スペクトラム症児もその障害のない子と一緒に活動したくなります。それが、少し苦手だったり嫌な活動でもがんばってみる思いにつながるのです（図・下段の②）。こういった集団は、異質さを認め合って共同するという意味で、「異質・共同」の集団と呼ばれます[1]。

図の上段の矢印と下段②の矢印は、同じ右向きです。しかし図・上段は大人が自閉スペクトラム症児を障害のない子の世界へ向け「させる」のに対し、図・下段②は自閉スペクトラム症児みずからがその世界へ入ろうとする矢印です。方向性は同じですが、本人にとっての意味はまったく違います。

そして図・下段②を生み出すためには、図・下段①が必要なのです。先月号の今関先生の実践はそのために、